平成３０年度竹の焼畑事業報告（速報版）　　2018/06/18：奥出雲山村塾・面代真樹

春焼き～火入れ

１．実施日時　平成３０年６月９日（土）　８：００～１８：００

２．実施場所　仁多郡奥出雲町佐白地内（ダムの見える牧場林地）

３．参加者数　火入れ従事者２２名（奥出雲町、雲南市、松江市、広島市、庄原市／島根大学学生・教員ならびにOB）／調査者・見学者１名　※総２３名

４．概　　要　12時35分着火、16時30分延焼終了、18時00分鎮火。
快晴、気温24℃、湿度60%、北西の風１m～３m（着火時）。
火入れ面積約10アール。

５．今後の予定

◉播種と作物の生育状況調査、間引き
陸稲、モチアワ、アマランサス、紅藜（ホンリー）、シロヒエ、タカキビを火入れ地に。防火帯ならびに昨年火入れ地へ２年目作物を雑草植生や再生竹の状態をみながら、穀物等を播種する。

◉夏の火入れを８月～９月に計画しており、該当地の伐開整備活動。

◉アワ、地カブなどの在来作物調査ならびに伝統食文化調査。

◉雑穀の乾燥・脱穀・調製の準備（場所・機具選択）と効率的方法の検討。

６．状況写真

▼防火帯放水後、エンジンポンプ動作確認、人員配置確認後、風下山手より着火。

▼約２時間で区画Ａの半分まで延焼。区画Ｂ、Ｃへ着火。Ｂは１時間で延焼終了。

▼18時00分、区画Ａが鎮火し、撤収に入った。

７．その他　（経過と要検証事項等）

◉6 月上旬の火入れについて

春の火入れはこれまで５月上旬に実施してきたが、今年は整備の遅れもあって梅雨入り後の６月となった。３日前と前日に降雨となっており、これが夏期であれば延期となったところ。春期の乾燥状態がある程度維持できていたことの証左となった。

過乾燥による飛び火も危険であるが、湿潤によって灰にまで燃え切らず、炭状態が山林近くに残ることもまた危険である（夜通しの巡回が必要となる）。

冒頭の条件に、今回は風向きと多少の強さが幸いしてうまく焼き切れている。例年であれば３時間もあれば鎮火までいくところ、６時間近くかかっており、来年からは梅雨入り前までの５月上旬～中旬に戻すよう計画立案に留意する。

◉時間経過

8：00　先発着・準備開始
8：30　参加受付開始
9：00　松江先発部隊到着
9：00　ミーティング後、準備開始、後発隊 10 時着
12：25　火入れ式（北西からの風 1m…火入れ局地／気温 24℃／晴れ／湿度不明）
12：35　着火　　（人員配置：点火部 3、側部 2、ポンプ 2×3、飛び火監視 5 等）
13：30　区画 A の火勢静まったため、材の積み移しを実施。
以後区画 A は最後まで人力補助継続。
14：00　区画 A が延長の半分ほどまで火が届いたことを確認（区画 B の点火によって人員が火中に取り残されるリスクがほぼ最小となる）。区画 B、C の風下側に着火。
14：15　区画 B、C ともに火勢強まり延焼開始。
14：40　区画 B、C、ならびに区画 A の風上に着火、迎え火とする。
15：30　区画 B、C は鎮火。区画 A の人力補助継続。
17：00　区画 A 延焼終了
18：00　鎮火確認、解散。
19：00　火入責任者現場最終確認、退去

◉飛び火と延焼速度

・飛び火は今回発生せず。防火放水を念入りにしたことと、前日の降雨により周辺土中の湿度が高く保持されていたためと捉える。一方で、区画 A は自然延焼が最後まで起こらず、人力によって積み直すことで５時間あまりを要した。それでも部分的に燃え残りが出ているが、ほとんどの地面で炭の残りはわずかしかなかった。

・区画 A の燃焼に時間がかかったのは、降雨による乾燥率の低さにもよるが、平坦面であることの要因が大であったと考える。区画 B・C が速やかに延焼したことは、材の積が高かったこともあるが急斜面であったことが大きいと仮想できる。斜面のほうが酸素の吸入がとりやすいことによる（風が入りやすい）。まったくの平坦地での火入れは今回が初めてだったこともあり、これも今後検証していくべき現象であった。

◉土質と今後の環境管理

・土は全体に、有機質表土といえるがきわめて薄く（1mm 程度）、5cm～10cm で層をなす粘土の直下は真砂土という箇所が典型である。通常は耕起と有機質の投入をしなければ作物栽培は難しい土であることから、これまで以上に多種の雑穀、芋類の栽培をもって、今後の荒廃地の再生についての実験とする。

竹の根も入っていない粘土

5cm～10cm 下に真砂土

根が入っているところは有機化しているが粘性は高い

---

†．平成３０年度竹の焼畑事業は「竹の焼畑 2018」と呼称。奥出雲山村塾、森と畑と牛と、島根大学里山管理研究会、ダムの見える牧場が主要主体となって取り組んでいる事業です。